

早稲田大学インクルーシブ教育学会ニュースレター

令和2年度（2020年）NO.2

誰も予期しなかったコロナウイルスによるパンデミックは、学校教育に大きなチャレンジを突き付けました。今回の研修は、ZOOMでのオンライン形式で、学校種や職種別のグループワークを組み込みながら、「できなかったこと」「やれた意外なこと」を整理し、UDLの観点からバリアになっていたものについて話し合いました。また、「教師にとってバリアだったもの」は「子どもにとってもバリアであったか」についても討議し、バーンズ先生からUDLの視点・ガイドラインに沿ってご指導いただきました。

ワーク① 新型コロナウイルス感染防止のための休校中と再開後の学校で、

「本来自分のしたい授業」ができなかったとしたら、それを阻んだバリアは何か？

【皆さんの意見】

- *課題の配付のみ行い、双方向の手段を持てなかった。*接触なし、会話なしのまま紙面上の評価になった。
- *自分でできる内容を課題にしたので、個人差が大きく生まれた。（集中力・課題量・スケジュール力の差）
- *家庭環境の差がそのままバリアとなった。（保護者が補助なしにはオンラインを操作できない児童）
- *課題を平均の力に合わせたため、上位、下位の子どもに困難が見られた。
- *進級間もない時期で、一人一人の様子や学力の把握ができないまま課題をさせることになった。
- *体力の低下を感じたが、課題を出してもとりくみが難しかった。（体育科）
- *教師1対クラス全員のzoomでは、一人一人に目が届かない。
- *子どもの「わからない」が表出されない。つぶやきが拾えない。
- *教室では、隣同士の話合い→クラス全体への広がりができたが、オンラインでは難しい。
- *チャットも、有効であったりバリアになったりした。（学校でチャットは禁止された。）
- *ブレイクアウトのグルーピングに困った。グループの話合いが把握しにくい。
- *教員の意識のばらつき・元に戻そうとする教員の存在



コロナ対策の今だから、
バリアだと感じてしまうけ
れど…

ワーク② ワーク①で出た教師にとってのバリアは、子どもにとってもバリアであったか？

距離	協働ペア・表情・生の語り合いなどができない
デバイス	学校・教師の技量・家庭・同じ環境がそろわない
学習への取組具合・内容	取り組み具合がばらばら・反応が不明・子どもにあってるか アクセスしやすい教材か
評価	学びに向かう力は評価できるか

【バリアとして感じられたものの整理】

これらは、だれのバリアなのか？ 今だから、バリアになっているのか？
今までも、実はバリアだったのでは？

バーンズ先生から



例えば・・・

取り組みのための多様な方法	提示（理解）のための多様な方法	行動と表出のための多様な方法
学習のゴールが見えるように提示	VTR の提供 (繰り返しのよさ・いつでも視聴可能)	提出方法を多様化し、限定しない
子ども同士がつながり交流がする機会をつくる	デバイスなどの新機能を活用する 従来のツールを新しい方法で活用	課題・情報の管理 チェックリストの作成と活用

教師は、教えるのではなく・・・

～学びのエキスパートを育てる。それは、こんな子ども～

- 目的をもち、やる気がある。
- 色々な学習リソースや知識を活用できる。
- 方略を使いこなし、自分で学びの舵取りをする。

～そのために～

- ★指導にどのくらいの時間をかけたかではなく、子どもがどのくらい学べたかを大切に考える。
- ★私たちが「教えなくては」、を離れる。何を学ぶ必要があるか（ゴール）をしっかりと考える。
 - ・シンプルな課題設定・演習をどこまで行うかを考える。その場合のフィードバックの仕方もクリエイティブに考える。
- ★公平でない状況の中で、学ぶために使えるものは何でも使うことが、公平性のある学習に近づく。
- ★一人一人どうしたら学びやすくなるかを考えれば、子どもは自分で学んでいく。ある程度の枠は必要だが、皆が同じスピードで学ばなくてよい。
- ★子ども自身が学習のゴールが見えているか・理解しているか。
 - 設定・提示されているのか。
 - 評価のルーブリックを提示するとよい。
- ★教えることをやめ、一人一人がどう学びたいかを大切にする。
 - 知識の伝達も大切だが、すべて教師が道筋まで作る必要はない。子どもが学びの道を外れても、もどってくるのを待つ。外れている間に学んでいることもある。
- ★評価が明確になっていることが必要
 - （高橋）指導案には、B 基準のみ示しがち。A や A+ もあるはずなのに明確でない。子どもに明示すれば、個々の子どもが、自分で評価し上がっていくのがわかるようになる。
- ★自分の学びのペース作りが（デバイスとの関わり、対話的な学習との関わり）ができるように導く。
- ★学び方がわからない子どもには、学びを伸ばす支援を行う。
 - どこまでできていて、どこを直せばよいかを支える。誤答分析を行う。
 - つまづきはどこか→次につまづかないようにするにはどうしたらよいか支援する。

★一人一人に対応できるのか？つまりきを全て解消するのは無理である。

→ゴールを理解し、子ども自身が自分でバリアを少なくする方法を見つけ、選べるようにする。教師に示された方法ではしっくりいかないなら自分の方法を提案できる。

(提案できる雰囲気も作っておくことが大切)

→教師が学びに対する評価（ゴール）をしっかりと持つことが大切である。

→（本田）「ワークシート」は、ともするとどういう順序でもっていきたいかという先生の思惑はあっても、子どもに行き先が見えないものになりがち。ゴールが子どもにも分かるように示されていることが肝要。

★途中経過をフィードバック・アドバイスできる。

→ゴールまでの経過がわかり、足場架けができるようにする。



参加者の皆様の声（アンケートより）

・将来的には、「学校」の在り方そのものにもっとバリエーションができ、学ぶ場の選択肢が増えるとよいと思っています。心理的に安定していて、親のUDLへの理解がある子どもたちは主体的に取り組みやすいと思います。支援が必要な子たちの、学ぶことへの動機づけの部分、到達可能・実現可能なゴール設定をいかに共に考えていけるかを、改めて考えるきっかけとなりました。（小児科精神科：心理士）

・学校が再開し、色々なことに不安を感じていました。意見や解決策をシェアできてよかったです。

・学びのエキスパートを育てるためには、今の環境でどのように足場架けをしたらよいかについて、立ち止まって考える機会になりました。

・ブレイクアウトでの共有も有意義でした。休校が決まった時、課題ありきですすんでいたことを反省し、「ゴール」や「なぜ学ぶのか」が重要であることを改めて認識しました。

・非常に刺激的で有意義な研修会でした。「大事なものは、ゴール設定」「有効な方法なのか？ゴールが達成できるものか？」「よいフィードバックができていないか」再確認できました。勤務校でさっそく活かします。

・大人にとって障壁となるものと、子どもにとって障壁になるものは別物だったり、実は自分の目の前の障壁は自分の考え方取り組みだったのだなと気が付きました。

・zoomになれるという意味でも、このような研修会はよかったと思います。普段参加できない遠方の先生方と話し合えたのがよかったです。

たくさんの感想をお寄せいただき、ありがとうございました。